

日本的キリスト教についての一考察
—今泉源吉『みくに』における反ユダヤ主義から、日本キリスト教界が受けた
弾圧を読み解く—

Mikuni as a Christianity Made in Japan
—its anti-Semitism and the persecution of Japanese Christians in the early
Showa era—

加藤 知子
Tomoko KATO

Abstract

After 1873, when Christianity became legal in Japan, Christian beliefs began spreading all over the nation. As syncretization being one of the Japanese cultural characteristics, some Japanese tried to grasp Christianity in the Japanese context and established their made-in-Japan Christianity. Imaizumi Genkichi's *Mikuni* movement was one of them. *Mikuni* activists published their monthly *Mikuni* magazines from 1935 to 1943 with Imaizumi as its chief editor. The *Mikuni*, born out of an intercultural turmoil between a foreign religion and Japanese traditional ideas, was right-wing in its opinions, actively pro-war, and riddled with anti-Jewish remarks. This anti-Semite attitude was seen not only in the *Mikuni* but also in non-Christian Japanese during that period. In this paper, the author tries to argue that the anti-Semitism in Japan of the early *Showa* era, which probably influenced the *Mikuni*, should be one of the reasons why Japanese Christians were persecuted and controlled by the Japanese government in the 1930s and 40s. Due to the limited number of pages, this introductory paper mainly outlines the Japanese-ness, made-in-Japan Christianity, and the Anti-Semite movement around the world including Japan and the *Mikuni*, leaving the details of the anti-Semitism in the *Mikuni* to another paper following this current one.

キーワード：日本的キリスト教、『みくに』、今泉源吉、反ユダヤ主義、キリスト教弾圧

I. はじめに

本論文は、日本的キリスト教月刊誌『みくに』（今泉源吉主筆）の論考であり、日本では少数派であるキリスト教徒が、キリスト教徒であると同時に日本人であることを両立させようと試みる時の一例として同誌を考察する。『みくに』では、その両立を模索する中で、第3巻ごろから反ユダヤ主義が強くなったことが認められるが、紙幅の関係上、本論文を、日本的なるもの、日本的キリスト教、反ユダヤ主義、『みくに』、『みくに』に見られる反ユダヤ主義、についての概論的なものとし、『みくに』における反ユダヤ主義についての詳細は、本論文続編を今後予定することとする。

第二次世界大戦参戦の要因を一つに絞れるほど人も歴史も単純ではないだろう。しかしながら、昭和初期、世界の各地で見られた反ユダヤ主義がキリスト教界の一部を含む日本にも存在した。もし、それが大戦への歩を進める理由の一つとなり、日本国内外でのキリスト教徒の団結を困難にし、日本国内でのキリスト教弾圧の一因ともなったとするならば、『みくに』に見られる反ユダヤ主義についての考察は、今後、日本に反ユダヤ主義が広がる事態となった際に警鐘を鳴らす一助ともなるのではないかと思われる。

本論文の研究手法は文献研究である。『みくに』は戦後散逸し入手が困難だが、名古屋市在住（2021年現在）の大島純男牧師宅には『みくに』全巻・全号が残されており、大島牧師の好意で拝見が可能になった。『みくに』の他、藤巻孝之や清水二郎の著作などの情報も頂戴することができた。資料散逸を防ぐため大島宅でのリサーチがほとんどとなった。赤の他人である本論文筆者が夫妻のご自宅で作業をさせていただいたことにも心より御礼申し上げます。また、本論文に引用した中川健一著作を紹介してくださったのは星城大学経営学部の神野真寿美教授であり、Abstract 英文校正を担ってくださったのは Juile Ichikawa 氏である。この場を借りて感謝の念を表したい。ただし、本論文の考察や見解は本論文筆者のものであり、また、文責も本論文筆者に帰する。本論文は、2020年度・2021年度星城大学経営学部研究費を受けて執筆されたものである¹。

Ⅱ. 日本のキリスト教と今泉源吉『みくに』—研究の背景—

(1) 日本のなるものと日本的キリスト教

1853年に米国人ペリーが来航、翌年には日米和親条約が成り、日本の鎖国の終焉となる。明治維新後 1873年にはキリスト教禁止の高札も撤廃された。欧米文化と共にキリスト教が日本に流入するが、日本では速やかにそれらの日本化がなされた。そもそも日本では、幕末・明治維新时期に留まらず、異文化（宗教も含む）を取り入れる時、あるいは、新しいものが開発された時、日本の既存のものと置き換えるのではなく、何とか習合し共存を図ろうと試みる伝統がある²。

日本における、古来脈々と続くこのような営みについて、丸山眞男は「無限抱擁」と表現¹、三島由紀夫は「八咫鏡」のメタファーを用いて説明を試みている²。丸山は、新文化が旧文化と対峙することのない「無限抱擁」を批判的に捉えているが、三島は、何でも映し出す「八咫鏡」は日本内部の多様性を担保するためにも不可欠なものであるとしている。両者とも、「無限抱擁」「八咫鏡」の敵と見做されるのは、そもそも「無限抱擁」「八咫鏡」を否定するものであるという点では共通している。すなわち、丸山によればキリスト教とマルクス主義である³。これらは共に他との共存を許さないとされるからである。三島も、

¹ 本論文では、引用（内容を本論文筆者がまとめたものも含む）については文末の参考文献欄に、その他注釈などの注は脚注とし、前者は肩括弧つき、後者は括弧無しの数字を付した。同じ文献から複数回引用する場合は、最初の引用の際には参考文献欄に、二回目からは、参考文献 1)書、p.1 などとして、脚注に記した。脚注では文献に括弧を、ページ数に p. や pp. を付けた。

² 身近な例には日本の文字体系がある。カタカナ・ひらがなが漢字を置き換えることはなく、ローマ字が導入されても日本古来の文字が消えることはなかった。現在では四種類の文字にそれぞれ役割を持たせて、全て共存させている。

³ 参考文献 1)書、p.16。

八咫鏡がスターリンの鏡になったら、日本の多様性は失われるとしている⁴。

丸山は、日本では無限抱擁されたものが交わらないで雑居していると観察しているが⁵、サミュエル・ハンチントンが、“‘indigenization’ of those cultures through replication and refinement (「それらの文化を模倣し、より洗練させることによる『自国化』」⁶)” という Arata Isozaki の言葉³を引用して、日本について言及しているように⁴、日本では単に異なるものがそのまま雑多に同居しているというわけではないだろう。例えば明治のキリスト教禁止の高札撤廃後宣教がなされた欧米経由のキリスト教は、次々と日本の伝統と交わり日本化されたものが現れた。これについてはマーク・R・マリンスの研究があり、メイド・イン・ジャパンのキリスト教として、内村鑑三による無教会や松村介石による道会などが挙げられている⁵。同著の中では、キリスト教が衝突を起こした相手は「神々の分業で成立し、『重層する義務』が習合した体系」である日本人の多元主義であると述べられている⁷。これは、上述の丸山や三島が指摘した、「無限抱擁」「八咫鏡」と相容れないものはキリスト教やマルクス主義である、と同様の結論であろう⁸。

日本の‘indigenization’そして習合の力は強く、内村鑑三も、「いかなる外来のものも、日本の土壌でそれがそのまま移植されたためしはない〔中略〕。政治的なものであれ、科学的、あるいは社会的なものであれ、それは日本の風土に順化する前に、まず日本人の手による大きな修正を経なければならない」⁹と述べている。

このような土壌で、キリスト教を日本的なるものにしようとする試みがなされるのは当然のことで、その、日本的にしようとする試み自体が極めて日本的なるものであると言える。内村鑑三自身は、自らのキリスト教を「日本的キリスト教」と呼んでいるが¹⁰、「日本的キリスト教」の定義には、笠原芳光のものがあり⁶、次のとおりにまとめられている。

広義に解すれば日本ということを実覚したキリスト教はすべて日本的キリスト教で

⁴ 参考文献 2)書、p.327。1968年茨城大学生とのティーチインでの三島の発言。

⁵ 参考文献 1)書、p.71。

⁶ 日本語訳は、Isozaki を引用した *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order* の日本語訳『文明の衝突 上』p.156によるものである。Isozaki の英文論文では、参考文献書 3)書、p.18から引用。

⁷ 参考文献 5)書、p.222。

⁸ 参考文献 5)書の p.39 の表 2 にまとめられている「日本の土着キリスト教運動」は、次のとおりである（カッコ内は創設年）。内村鑑三による無教会（1901年）、松村介石による道会（1907年）、川合信水による基督心宗教団（1927年）、杉田好太郎による栄光の福音キリスト教団（1936年）、松原和人による活けるキリスト一麦教会（1939年）谷口とくによる基督教カナン教団（1940年）、小池辰雄による日本キリスト召団（1940年）、村井壱によるイエス之御霊教会（1941年）、大槻武二による聖イエス会（1946年）紺本薫による聖成基督教団（1948年）手島郁郎による原始福音・キリストの幕屋（1948年）、今橋淳による活かすキリスト・エクレスシア（1966年）、仲原正夫による沖縄キリスト教福音センター（1977年）。

⁹ 内村鑑三「日本における教会問題」『内村鑑三英文論説翻訳篇』上巻（亀井俊介訳）、岩波書店、p.35、1984年、『内村鑑三全集』第1巻（1886年）、p.159、（英文題“A Church Question in Japan”）、参考文献 5）、p.53に引用。中略は本論文筆者による。

¹⁰ 内村鑑三「日本的キリスト教」『内村鑑三英文論説翻訳篇』下巻（道家弘一郎訳）、岩波書店、pp.306-307、1985年、『内村鑑三全集』第29巻（1925-1926年）、pp.476-478、（英文題“Japanese Christianity”）、参考文献 5）、pp.54-55に一部引用。

あるといってもよいかも知れない¹¹。

狭義の厳密な意味における日本的キリスト教はたんに日本の伝統を自覚し、その思想とキリスト教との関連を求めるだけでなく、積極的に「接合」をはかる思想である¹²。

笠原は、接合の方法により日本的キリスト教は、混淆、両立、触発の三つのタイプに分けられるとしている。混淆論による日本的キリスト教の主張者としては（括弧内は著作）、渡瀬常吉¹³（『日本神学の提唱』）、椿真泉（『日本精神と基督教』）、大谷美隆（『国体と基督教』）、山田益（『国体と基督教』）、原戊吉（『日本人の神』）、今井三郎（『日本人の基督教』）、佐藤定吉（『皇国日本の信仰』）、中田重治（『聖書より見たる日本』）が挙げられている。両立論を唱えた者としては、武本喜代蔵（『日本的基督教の真髓』）、藤原藤男（『日本精神と基督教』）が、また、触発論に立つ者としては、魚木忠一（『日本基督教の精神的伝統』）が挙げられている。マリNZは、『みくに』には言及していないが、これは、『みくに』主筆今泉源吉が日本基督教団の一員となった中渋谷教会の長老牧師であり、マリNZは第二次世界大戦時下の統制により生まれた日本基督教団を、「キリスト教土着運動と理解しているものの自然な展開であるとも、実例であるともいいがたい」¹⁴と判断しているためではないかと思われる。この判断の妥当性については、別の機会に考察する。

なお、笠原の『『日本的キリスト教』批判』はタイトルのおり日本的キリスト教批判であるが、論文の最後は、次のように展開される。すなわち、そもそも、「キリスト教自体が混淆宗教であるのに、いまさら日本思想との混淆を批判することができるだろうか」¹⁵、キリスト教が世界宗教へと発展したのは「ローマの国家権力とのちに癒着、結合したからではなかったか」¹⁶、カトリック教会は、「宗教的のみならず政治的にも強大な権力を所有していた」¹⁷、従って、「日本的キリスト教に対してのみ国家との密着を批判するのは大きな手落ち」¹⁸である。このように、「日本的キリスト教への批判は、必然的にキリスト教自体、キリスト教総体についての批判」¹⁹となる。しかしながら、ここで言うキリスト教とは宗教として大成したいわゆるキリスト教のことであり、その出現前のイエスという存在そのもの（イエス自身はキリストと称さず、思わなかつたろうから）を発見すれば、キリスト教と呼ばれるものへの批判の手がかりとなるのではないか、と言う²⁰。従って、笠原の結論としては、日本的キリスト教を批判する者は、キリスト（救い主）ではないイエスに焦点をあてる、ヒューマニズム的思想へと向かうだろうと言うことになるだろう。

¹¹ 参考文献 6)書、p.116。

¹² 参考文献 6)書、p.117。

¹³ 渡瀬常吉は海老名弾正の高弟（参考文献 6）書、p.120）。

¹⁴ 参考文献 5)書、p.35。

¹⁵ 参考文献 6)書、p.138。

¹⁶ 同。

¹⁷ 同。

¹⁸ 同。

¹⁹ 同。

²⁰ 参考文献 6)書、p.139。

(2) 月刊誌『みくに』と「みくに」運動

月刊誌『みくに』は、法律家であると共に日本基督教団中渋谷教会長老牧師を務めた今泉源吉（1891年生まれ、東京帝国大学法学部卒）が主筆となり、1935年から1943年まで発行された。発行部数は800である⁷⁾。この雑誌を軸として日本的キリスト教の一種とも言える「みくに」運動が展開される²¹⁾。月刊誌『みくに』第1巻1号の「發刊の辭」⁸⁾には、「『みくに』と題したのは、皇國を意味すると同時に、神國を含めたのである。神國實現のための皇國とか神州日本とか謂ふ意である」²²⁾とある。この辞から判断するに『みくに』は、前節で言及した渡瀬常吉らの系譜に連なるものとして捉えることができよう。実際、日本的キリスト教の主な主張を概観した笠原の前掲書文末には、「今泉源吉主筆の『みくに』やそれに対する同派の松尾相の批判などは重要と思われるが、見る事ができなかった」²³⁾と記されているのだ。笠原は、『みくに』を広義としても狭義としても「一九三〇年代を中心にして、遡れば明治初頭にはじまり、くだっては戦後の今日にまで問われる現象」²⁴⁾である日本的キリスト教の一つとして検証しようとしていたのであろう。

『みくに』の発刊時期が、第二次世界大戦開戦前夜から大戦中と重なっているためなのであろうか、「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」⁹⁾等を出している日本キリスト教界にあっては、言及しづらい文献のようだが²⁵⁾、先行研究としては、大島純男、小室尚子、加山久夫、大久保正禎らのものがある。また、広く流通しているわけではないが、藤巻孝之が著したパンフレット（参考文献7）書）もある。藤巻は、もともと「みくに」運動に携わっていたが、後にそこから離れており、そのような視点から著されたパンフレットは貴重である。

小室は、日本におけるキリスト教土着化の視点から「みくに」運動を論じており、『みくに』の概要をコンパクトに捉えた論文や¹⁰⁾、「みくに」運動に携わった福元利之介についての論考がある¹¹⁾。また、大久保は、日本的キリスト教の一種としての「みくに」運動を、第二次世界大戦前夜から戦中の軍事色と重ね合わせて論じており¹²⁾、加山は、『みくに』誌上で批判された賀川豊彦に焦点をあてた論文を執筆している¹³⁾。大島は、『みくに』主筆の今泉源吉についてまとめた伝記的論文や¹⁴⁾、また、「みくに」運動家の一人、池田千尋についての論文を著している¹⁵⁾。

これら先行研究は全般的に、1930年から40年代前半にかけての日本一軍事が圧倒的に優先事項となっていた—という文脈の中で『みくに』を捉えている。『みくに』執筆者ら日本的キリスト教信奉者は愛国者であり、当時日本の「キリスト教界の表通りを闊歩する」²⁶⁾ことができた。彼らは愛国の念から日本防衛を訴え、第二次世界大戦への道のりの中で、政府や軍部の重圧のためではなく自ら進んで報国し、若者を戦争へと激励したのである。

当時の日本人が対英米戦やむなし、と考えた理由は複数あろうが、『みくに』においては、

²¹⁾ 本論文では、月刊誌のみくには『みくに』、運動のみくには「みくに」と表記する。

²²⁾ 参考文献8)書、p.1。

²³⁾ 参考文献6)書、p.139。

²⁴⁾ 参考文献6)書、p.115。

²⁵⁾ 『時の徴』同人編集の『日本基督教団戦争責任告白から50年:その神学的・教会的考察と資料(新教コイノーニア33)』巻末には、各教団・団体の戦争責任告白文が掲載されている。通常、教団・団体のインターネットサイトでも告白文が掲載されている。

²⁶⁾ 参考文献10)書、p.222。

それは、英米の背後にあるとされるユダヤ勢力に対する危機感であると考えられたようである。『みくに』における反ユダヤ主義については、藤巻や小室の著作²⁷にも言及されているが、両著の主テーマではない。昭和初期のキリスト教関係者と目される人々の中で、反ユダヤ主義が原因で戦争協力へと動いた者がいた、という事実は、そもそも日本のキリスト教史ではあまり語られないことがないようだ。『時の徴』同人が編集した文献巻末に掲載されている戦争責任の告白文等の中にも、反ユダヤ主義に陥ってしまったことを懺悔する文面は見当たらない¹⁶。これらの文章を出している教団・団体には、反ユダヤ主義はなかったのかもしれない。しかしながら、防衛しなければならない日本の真の宿敵はユダヤ勢力である、という信念のもと、最右翼とは言え元来キリスト教系の「みくに」運動が展開されたのであれば、そしてその信念が、「みくに」関係者の大戦支持への歩みを確固たるものとしたのであれば、同運動の主軸『みくに』に見られる反ユダヤ主義に着目し、なぜ反ユダヤ主義が同誌に根を張ることとなったのかを読み解くのは意義があるといえよう。

Ⅲ. 反ユダヤ主義と『みくに』

(1) 世界に見られる反ユダヤ主義

反ユダヤ主義と言えば、1933年にドイツの首相となったアドルフ・ヒトラーによるものがすぐに想起されるが、反ユダヤ主義が起こったのは、ナチスが政権を握っていたドイツが最初で最後ではない。黒川知文は、古代から近代（黒川は宗教改革以降を近代としている）までに見られるユダヤ人迫害を概観しており、その中には、中世におけるユダヤ人迫害、スペインや東欧、ロシアにおけるユダヤ人迫害の他、宗教改革で有名なマルティン・ルターによる反ユダヤ的発言や、フランス、ドイツ、イギリス、米国における反ユダヤ主義も含まれている¹⁷。中川健一は更に遡って、イエス・キリスト以前に見られた反ユダヤ主義にも言及している¹⁸。ミカエル・ブラウンは、歴代キリスト教会が行ってきたユダヤ人迫害について論考している¹⁹。20世紀になってからの反ユダヤ主義を支えるものとしては、ユダヤ人による世界支配陰謀神話があり、その裏付けと称して『シオン賢者の議定書』が出回っていた。この議定書の出所と、世界的拡散についての詳細は、ウルフ・アニスフールド賞受賞のノーマン・コーンの著作がよく知られている²⁰。

キリスト教圏の欧州では反ユダヤ主義が古くから広く見られる。キリスト教はユダヤ教を母体にして生まれた宗教であるが、欧州キリスト教界では、キリスト教がユダヤ教を乗り越えた、あるいは、置き換えた、と考える神学上の立場（置換神学）があるので、キリスト教界でその母体であるユダヤ教に対して迫害が広がってもキリスト教が悪と見做されることはなかったのだろう。メシアニックジュー²⁸を支援する中川健一は、「旧約聖書のイスラエルは、新約聖書の教会によって置き換えられた（つまり、置換された）と考える。従って、今やイスラエルに与えられた約束はすべて教会が引き継いでおり、イスラエルは特別の使命を持った民ではなくなったと考える」²⁹という置換神学の定義を紹介している。

第二次世界大戦後も反ユダヤ主義が消滅したわけではなく、イスラエルのパレスチナ対

²⁷ それぞれ、参考文献 7)書と 10)書。

²⁸ メシアニックジューとは、ユダヤ人でありながらイエスを救い主として信じる人々のことを言う。メシアニックジュー支援には置換神学克服が不可欠であるとされる。

²⁹ 参考文献 18)書、p.80。

応などに対する批判から、反イスラエル運動として BDS (Boycott, Divestment, and Sanctions ボイコット、投資撤収、制裁) 運動が起こり、危機感を抱いたアラン・ダーショウィッツ (ハーバード法科大学院教授 (当時)) は、著作を出版し反論を試みている²¹⁾。更に戦後は、イスラム圏³⁰⁾における反ユダヤ主義が目立つようになっている。例えば池内恵によれば、世界支配陰謀神話がイスラム教終末論と合流し、「イスラエルやアメリカを単なる現世的な陰謀の主体ではなく、終末の前兆として出現する偽救世主とみなし、『偽りの善』をふりかざして人々を欺く悪の勢力と解釈する。そして、イスラーム共同体という『真の善』と偽救世主が代表する悪の勢力との間に終末の争闘が始まっている」²²⁾と信じられているというのである。藤原和彦も、陰謀神話とイスラム教終末論との合流の例として、世界の紛争の背後にはユダヤ人がいるが、イスラム教徒のおかげで「ユダヤ人から苦しみを受けたあらゆるものが、木や石までもが、ユダヤ人を排除して安らぐ日がやって来る」²³⁾というイブラヒム・ムダイリスの説教を紹介している。

反ユダヤ主義は、いつの時代も、民族的・宗教的差別に加えて、覆いかぶさるような陰謀説の雰囲気の中にあると言えるだろう。20 世紀の反ユダヤ主義に『シオン賢者の議定書』の存在があるように、中世においては、血の中傷事件 (ユダヤ人がキリスト教徒の子どもの血を飲む) や聖体冒瀆の中傷事件 (ユダヤ人が聖体のパン (イエス・キリストの体) を教会から盗み踏みにじる) などを信じる民衆もいたという³¹⁾。陰謀説など、真面目に取り組む必要はないと考える人々がいる一方で、実際には、時として陰謀説が、社会を悲惨な方向へと動かす濁流としての役割を果たすことがあるのである。

アドルフ・ヒトラーは 1945 年 4 月 30 日に自殺、5 月 8 日には欧州戦線は停戦となる。ナチス・ドイツ下迫害にあったユダヤ人が救出され、ニュルンベルク裁判にてドイツは裁かれた。しかしながら、ヒトラーらによる反ユダヤ主義は、もともと欧州はじめ世界各地に根を張る反ユダヤ主義の一例であり、また、そもそもそのような反ユダヤ主義の存在のために、ナチス・ドイツの反ユダヤ主義が勢いを増した時には歯止めがかけられなかったのではないか。第二次世界大戦中のユダヤ人迫害に注目しすぎるがあまり、ヒトラーとドイツの敗北と共に反ユダヤ主義も消滅したと考えるてしまうことは、現在の反ユダヤ主義の現実を覆い隠し、それに対処する術をも見失うのではないかと思われる。

(2) 日本における反ユダヤ主義と『みくに』に見られる反ユダヤ主義

前節で言及したとおり、20 世紀になってからの反ユダヤ主義はユダヤ人による世界支配陰謀神話と結びついており、『シオン賢者の議定書』も活字化された。日本では包荒子などにより紹介されている²⁴⁾。包荒子は安江仙弘 (最終階級は陸軍大佐) のペンネームである。昭和初期には、日本を取り巻く国際情勢とユダヤ人との関係を論じた著作が日本でも出版されている。例えば、大野慎は、革命の背後にはユダヤがいると言い²⁵⁾、安谷宗虔によると、支那事変はユダヤの陰謀であるという²⁶⁾。石井絹治郎は、第一次世界大戦はユダヤの陰謀であると主張し²⁷⁾、四王天延孝は、第二次世界大戦への道の背後にユダヤ人がいる、とした²⁸⁾。このように日本を追い詰めようとする全勢力の陰にユダヤ人がおり、そこで、

³⁰⁾ イスラム、イスラームの表記については、本論文筆者が記す場合はイスラムとし、他は、引用・言及する文献内の表記に従った。

³¹⁾ 参考文献 17) 書、pp.115 – 121。

ユダヤ勢力と結ぶ各国と日本は対抗しなければならないという結論が導かれる。このような世界観が、月刊誌『みくに』に見られる反ユダヤ主義と平行なのである。

日本では、ドイツ並みのユダヤ人迫害は起こらなかったが、上記のような著作が日本の巷に出回り、当時の社会的雰囲気を作り上げる一要素となっていたと考えられる。『猶太思想及運動』³²等の著作がある四王天延孝は陸軍中将であり、このような立場にある者が各地でユダヤ人に対する警戒心を説く講演をしていたことは注目に値するだろう。当時の日本社会に流れる反ユダヤ主義なる空気が『みくに』に影響を与えたことは否定できないと考えられる³³。

『みくに』では、反ユダヤ主義から反キリスト教が導かれることになる。中渋谷教会長老牧師も務めたことがある今泉源吉主筆の『みくに』がもともとキリスト教系の雑誌であるからこそ一層、彼らなりの自戒の念を込めてであろうか、自分たちがかつて信じてしまった欧米由来のキリスト教からの強い決別表明となっている。すなわち、ユダヤ人と対抗するのであれば、彼らの宗教とも対立し、また、そこから派生したキリスト教とも対立すべきである、というのが彼らの理屈である。キリスト教はユダヤ教が母体で、ユダヤ教とキリスト教でいうところの唯一神は同じだからである。今泉の、ユダヤ教とキリスト教の神に対する闘いの決意は、「猶太神とのたゝかひ」²⁹⁾に結実している。ここでの猶太神とはユダヤ教とキリスト教の唯一神である。日本に開国を迫ったペリーはキリスト教の讚美歌を歌ったが、今泉によれば、これは日本に対する「言葉たゝかひ」であるという。この讚美歌は、『聖書』「詩篇」第95篇がもとになっているが、「詩篇」は旧約聖書の一部である。旧約聖書はユダヤ教でも用いられている。今泉は、「ユダヤが英國を占領してから、英國の教會は詩篇を歌ひ易いやうに手を入れて之を禮拜に用ひてみた」³⁴と主張する。だから、英國はもちろん、この讚美歌を歌った米国人ペリーの背後にもユダヤ人がおり、彼らは日本人を圧迫しているのだ、ということになる。今泉は、山中豊吉の「猶太禍と基督教」に言及しながら、ペリーらの来航を「驚くべき猶太思想の日本侵攻ではないか」³⁵と非難している。

キリスト教圏であった欧米には根強い反ユダヤ主義があり、単なる社会的雰囲気というだけではなく、国家の政策として、ユダヤ人が弾圧された国もある。しかしながら、前節で触れたように、欧州キリスト教界では、キリスト教がユダヤ教を乗り越えた、あるいは、置き換えた、と考えるため、反ユダヤ主義が高まっても、それが反キリスト教に結びつくことはなかった。しかしながら、日本における今泉らの『みくに』では、ユダヤ教が悪ならば、同根のキリスト教も悪である、そして、このようなキリスト教を礎とする英米も悪である（背後にユダヤ勢力）、という方向に論が進んだのであった。行き着く先は、当時の日本の風潮と同様、悪に立ち向かうのは日本である、という結論である。そして、明治時代になっても攘夷を実行しようとした神風漣の戦いは「うけひ」であり、彼らの英魂が^{さきがけ}魁となり英米撃滅の大東亜戦争が戦われているのだ、と主張されることとなるのである³⁶。

³² 内外書房より 1941 年に出版。

³³ 四王天延孝の口述をまとめたものに、『第三インターナショナルに就て』（新国民協会、1928 年）、『フリーメーソン秘密結社に就いて』（人類愛善会亜細亜本部、1933 年）、『メーデーとフリーメーソンの正体』（愛国義団本部、1937 年）などもある。

³⁴ 参考文献 29)書、p.3。

³⁵ 同。

³⁶ 参考文献 29)書、p.6。

このようにして、当初は日本的キリスト教雑誌として出発した『みくに』は、反ユダヤ主義から反キリスト教へと進み、ついには、キリスト教そのものと決別することとなった。『みくに』は第9巻第3号をもって発行が終わっている。第二次世界大戦はその後も続いているが、もし『みくに』が引き続き発行されていれば、1945年の終戦時の誌面はどのようなになっていたのだろうか。

(3) 1930年代から40年代前半までの日本的キリスト教界が受けた弾圧

第二次世界大戦下、日本のキリスト教界も統制され日本キリスト教徒は軍事に挺身した。当時の状況について、日本基督教団や同志社大学が一次資料をまとめている³⁷。また、第二次世界大戦とキリスト教に関わる論考はキリスト教系出版社からいくつも出版されており、21世紀になってからもまだ第二次世界大戦における日本キリスト教界の清算は終わっていないようである³⁸。その他、第二次世界大戦前に創設された長い歴史を持つ教会では通常、教会史や教会員の証言集などを編集している。これはキリスト教系学校も同様で、各校とも、第二次世界大戦の記憶を何らかの形で語り継いでいるのが通例である。愛と平和を説くキリスト教を信奉する者が戦争に協力したことを懺悔する一方、少数派の日本キリスト教徒が、全体主義的色彩を帯びた国家権力に抑圧されたという歴史解釈が大半であるが、実際には、当時の日本キリスト教徒も一枚岩ではなかった。

『みくに』は、第8巻第10号より三か月連続して賀川豊彦への反論特集を組んでいる。ベストセラー作家でもあるキリスト教徒賀川は反戦の立場を取っており、彼に対する今泉源吉の発言は手厳しい³⁹。賀川は「モットー³⁹の指令で百萬救霊の神の國運動を起こして人民戦線的な役割をつとめた」⁴⁰が、このモットーについては「猶太系米人でその背後に紐育の猶太教祭司のステフエン・ワイズが連絡をもつてみて何億弗でも運動資金を猶太系資本家から引き出してくる。〔中略〕日本から青島を還付させたのもワイズ等の陰謀であつた」⁴¹というのである。ここに見えるのは、ユダヤ勢力が背後にいる英米派、彼らと対峙する日本、その日本の中にキリスト教徒賀川という敵の尖兵がおり、その尖兵をキリスト教会の

³⁷ 日本基督教団宣教研究所によるものは1997年発行の『日本基督教団の成立過程—1930~1941年（日本基督教団史資料集）』、1998年発行の『戦時下の日本基督教団—1941~1945年（日本基督教団史資料集）』などがある（いずれも日本基督教団宣教研究所）。同志社大学が関係している著作は、同志社大学人文科学研究所/キリスト教社会問題研究会（編）・和田洋一（監修）・杉井六郎/太田雅夫（編）による、1972年発行の『戦時下のキリスト教運動〈1〉昭和11-15年—特高資料による』、杉井六郎・太田雅夫（著）・キリスト教社会問題研究会（編）の、1972年発行『戦時下のキリスト教運動〈2〉昭和16-17年—特高資料による』と1973年発行『戦時下のキリスト教運動〈3〉昭和18-19年—特高資料による』（いずれも新教出版社）などがある。

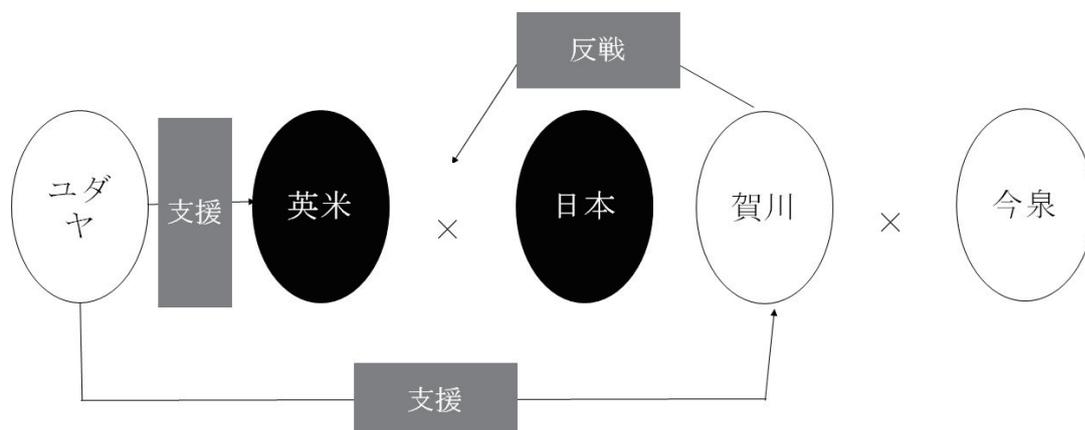
³⁸ 21世紀になってからも、キリスト教史学会（編）による2015年発行の『戦時下のキリスト教—宗教団体法をめぐって』や樽松かほる・大島宏・高瀬幸恵・柴沼真・影山礼子・辻直人（著）の2017年発行『戦時下のキリスト教主義学校』（いずれも教文館）、『時の徴』同人（編）の2017年発行『日本基督教団戦争責任告白から50年：その神学的・教会的考察と資料（新教コイノーニア33）』（新教出版社）（脚注25、参考文献16）書と同じ）がある。

³⁹ ジョン・R・モット。

⁴⁰ 参考文献30）書、p.9。

⁴¹ 参考文献30）書、p.8。中略は本論文筆者による。

長老牧師をつとめたこともある人物（今泉）が糾弾するという構図である（図）。



（図）今泉『みくに』が想定し批判した、国際情勢と賀川豊彦の役割（筆者作成）

キリスト教徒である賀川は日本が英米（キリスト教国）と戦うのに反対し、一方、元長老牧師であった今泉は、英米の背後にユダヤ勢力がいると信じて対英米戦を支援し、また、ユダヤ勢力の尖兵であるとして賀川を非難している。今泉は、賀川の反戦により日本の士気が失われ敵国を利するのではないかと考えたのであろう。キリスト教国との和平を保とうとする日本キリスト教徒が、キリスト教国との戦争を望んでいる元キリスト教会長老牧師（当時は既に欧米由来のキリスト教からは決別）により非難されている。国内でも国際的レベルでも国際和平に向けての団結が叶わない事態である。しかも当時は、今泉のような立場にある者が日本の表舞台におり、政権中枢に近いところにいた人々と協働していたのである⁴²。

しかしながら、その後賀川も対英米戦に関しては反戦から戦争肯定へと変化していったという⁴³。

ここで「みくに」運動と対比する形で着目したいのは、中田重治が創設した日本ホーリネス教会の流れを汲む者⁴⁴に対する弾圧である。中田は、第I章で言及したとおり、笠原芳光がいうところの混淆型日本的キリスト教の一種を唱えた人物である。キリスト教については、中田は、日本の伝統の中に見られる類似点に着目し、『聖書』の中には日本についての記述もあると主張している。例えば、イザヤ書45章6節にあるような「日のいづるところ」はヘブル語でミヅラホであり、これはミヅホ（瑞穂）と関係があるのではないかと、などである³¹。これは中田が、キリスト教で日本の伝統を押しつけて置き換えるのではなく、日本の伝統の中にキリスト教が見えるとするので、キリスト教と日本の伝統との共存を

⁴² 例えば、『みくに』第6巻12号 pp.20-21には、大日本赤子會創設の記事がある。同会の評議員には『みくに』常連の岩越元一郎と松野重正も含まれているが、顧問の中には頭山満、吉田茂（当時の肩書は元厚生大臣）の名前も見える。なおこの会は、「自由主義的文化、経済思想の浸潤による少子出産と晩婚による自然的出産減退」（『みくに』第6巻12号 p.20）を憂えて創設されたものであるという。

⁴³ 参考文献13)書、pp.114-126。

⁴⁴ 日本ホーリネス教会は後に日本聖教会ときよめ教会に分かれるが、論文では、以下一括してホーリネス教会と表記する。

図ろうとしたのだとも言える。また、中田は自らを「生やさしい平和論者ではない」⁴⁵という。すなわち、戦争がない状態は文字通り神業（イエス・キリストの再臨などによる⁴⁶）によれば可能であるが、それまではこの世には戦争はどこにでもあり、よって、「非戦論可なり、然し君が非戦論を唱ふるならば、宜しく先ず日本の國籍を脱してからいふべきである」⁴⁷というのである。戦争については当時の国際情勢に鑑み現実路線である。中田は米国や豪州の排日に対しても遺憾の念を示し⁴⁸、「白人優越主義（White Superiority）」について批判的言及もしている⁴⁹。そして、国際舞台で活躍するのはもちろん日本となる。

このような中田が創始したにもかかわらず、第二次世界大戦下ホーリネス教会は徹底した弾圧を受けた。1942年にはホーリネス教会（当時は日本基督教団第6部と9部）は結社禁止・教会解散となり殉職者も出た。『戦時下の日本基督教団—1941～1945年（日本基督教団史資料集）』によれば、弾圧の理由は彼らのイエス・キリストの再臨信仰であるという。イエスが再臨すれば世界の中心はイスラエルとなり、そこからイエスが王の王として君臨する。この信仰が皇室と日本の国体に反すると考えられたのである³²。創始者の中田は、再臨の際は、イエスがイスラエルに王の王として君臨し世界を統治する、という信念⁵⁰だけは、どうしても譲れなかったのだろうが、イエスが王の王となるとは、日本の天皇はイエスよりも位が下になるということの意味する。中田の『聖書』解釈によれば日本は、「ヨハネによる黙示録」第7章にある、日いつるところより登る天使として終末には活躍するが—この意味で日本は特別なのだが—、これはあくまでもイスラエルのための働きなのである⁵¹。このため当時の日本では明らかに国体に対する冒瀆となってしまったのである。しかしながら、それに加えて、ホーリネス教会が実際にユダヤ人支援に熱心だったことが危険視されたのではないか、という問いは、これまで積極的に投げかけられることがなかったようである。具体的な支援として、ホーリネス教会は「猶太人の爲に祈り又多少なりとも毎月献金をした」⁵²という。ユダヤ勢力が英米の背後におり、その英米が日本と対立しているという言論が広がる中、ユダヤ人に毎月献金をし彼らのために祈るホーリネス教会という団体は、当時日本の雰囲気の中で、どのように見られていたのだろうか。

中田の代表作『聖書より見たる日本』は1933年発行、既に包荒子の『世界革命之裏面』は世に出ている。1933年には、『世界を攪乱するユダヤ人』が出版され⁵³、反ユダヤ主義を唱えた四王天延孝は同年、『フリーメーソン秘密結社に就いて』を世に出している。フリーメーソンに対する警戒心はしばしば、反ユダヤ主義と重ね合わせて言及されるものである。中田自身は、日本における反ユダヤ主義について気づいており、「日本の陸軍の或人々が其

⁴⁵ 参考文献 31)書、p.141。

⁴⁶ 『聖書』では、イエス・キリストは弟子のユダ裏切りにより、十字架上で死刑となった後、三日目によみがえり天に上ったが、終末にはこの世に再臨するとされる。

⁴⁷ 参考文献 31)書、p.142。

⁴⁸ 参考文献 31)書、p.20。

⁴⁹ 参考文献 31)書、p.22。

⁵⁰ 参考文献 31)書、p.92。

⁵¹ 参考文献 31)書、pp.118 – 119。

⁵² 参考文献 31)書、p.102。

⁵³ 加藤越山編で、塩田盛道の講演を収録している（1933年、大阪図書株式會社）。

猶太人禍の独逸の本を譯したりして」⁵⁴などと非難している。

中田は1939年に逝去となるが（そのため、彼がホーリネス教会弾圧を目にすることはなかった）、同年は、欧州で第二次世界大戦が開始され、日本もますます軍事色が強まっていく。1941年12月、日本による真珠湾攻撃が実行され、対英米戦は現実のものとなった。宣戦布告を受けて、『みくに』では士気を鼓舞する論調が強まっていた。何と云っても、背後にユダヤ勢力があると彼らが信じる英米に対する闘いが、いよいよ始まったのである。ユダヤ人支援を打ち出していなければ、ホーリネス教会への弾圧の度合いは低まっていただろうか。当時はホーリネス教会だけではなく、日本のプロテスタント系キリスト教会が日本基督教団へと統制された。日本のキリスト教界を広く覆う形での圧力があつたわけであるが、ユダヤ色希薄な欧米由来のキリスト教が明治期に日本に導入され、そのキリスト教を日本で伝道しようとした人々と、中田のように、『聖書』の中のユダヤ的なものに着目し、そのキリスト教と日本的なるものとの融合を試み、ユダヤ人支援まで行った場合とでは、信仰上だけではなく、彼らを取り巻く社会における受け止められ方も異なるものとなつたのではないだろうか。文部省の行政指導に従い、解散後のホーリネス教会に対しては、当時彼らが組み込まれていた日本基督教団が、日本精神を含む再教育、皇国民としての錬成を行うことになり、ホーリネス教会の再臨信仰は日本基督教団から見捨てられた形になってしまった⁵⁵。しかしながら、ホーリネス教会牧師の辻啓藏に有罪判決を出した裁判長三宅正太郎は、無教会伝道者浅見仙作を無罪としている。辻・浅見両者共再臨信仰の持ち主であり⁵⁶、辻はその後再臨信仰から転向したのにもかかわらず⁵⁷、である。

昭和初期の日本におけるキリスト教界弾圧については、大戦といわゆる天皇制による圧力、という文脈で語られることが多い。そこには、当時の日本の反ユダヤ主義—陸軍中将のような立場にあつた者による講演も含む—が、ユダヤ教を母体としたキリスト教への不信感や反感へと繋がつたのか否か、という視点が抜け落ちている。樋口季一郎や安江仙弘、杉原千畝など、ユダヤ人援助に尽くした日本人の陰に、日本に存在した反ユダヤ主義が隠れてしまつているからなのだろうか。しかしながら、安江はそもそも『シオン賢者の議定書』全文を日本に紹介した人物でもあるのだ。昭和初期日本の社会的動向を丁寧に見つめ、抜け落ちてしまつた事実を拾い上げることは、今後、ある特定団体—ユダヤ人や日本のキリスト教界に限らず—に対しての弾圧の兆しが見えてきた時の予防線ともなるだろう。

IV. 異文化の狭間としての『みくに』

キリスト教と日本的なるものとの間で葛藤したであろう『みくに』主筆今泉源吉は、最終的には日本的なるものを選択したと言える。当時の国際情勢の中で、日本を護る一心で、敵なるユダヤ教、それを母体としたキリスト教、そしてユダヤ勢力が背後にあるとされた英米との対立の中で、欧米由来のキリスト教と決別したと考えることができる。日本が英米と戦火を交える中での決断でもあつたのであろうが、その結果、若者を戦場に送り出す言葉が『みくに』に舞つたのは遺憾である。

⁵⁴ 参考文献 31)書、p.95。

⁵⁵ 第2章「第六部・第九部弾圧と教団の対応」参考文献 32)書、pp.122 - 153。

⁵⁶ 6「関係教師の裁判記録」参考文献 32)書、p.154。

⁵⁷ 資料 63「辻啓藏に対する大審院判決書」参考文献 32)書、pp.160 - 161。

『みくに』が日本的なるものを選択した理由の一つに、主筆今泉源吉は、蘭方医である桂川家の血を引く者—源吉の母みねは桂川家出身—であることが挙げられるかもしれない。桂川家は徳川家において重用され、高い地位と名誉を保っていたことが、『みくに』にも連載された『名ごりの夢』に綴られている³³⁾。しかしながら欧州由来の学問を扱うわけであるから、結局は鎖国下の日本では少数派、異端児との認識が自他共にあったのではないかと想像される。更に、蘭学を修める者は他国と通じる接点としての存在でもあるので、鎖国期の日本では国防上も微妙な立場にあったであろう。事実江戸期には、渡辺崋山や高野長英などが弾圧を受けている。このような中で、自らのアイデンティティを探して、一層、日本的なるものを意識する蘭学者もいたのではないと思われる。

桂川家は、みねが幼少の頃維新を迎え、それまで幕藩体制の中で得ていた地位や名誉を一気に失う。加えて、外来知識供給源がオランダから英米に移り、蘭学自体が維新後の日本でその価値を喪失してしまう。江戸幕府と明治政府、鎖国と開国、オランダと英米というように、異なる文化とイデオロギー、政治体制のはざまに桂川家は、速やかに新しい体制へと移るという選択はしなかったようである。今泉源吉が日本では少数派のキリスト教徒となったのは、そもそも日本の中ではある意味異端児であった桂川家の血を引く者であること、そして、結局は、キリスト教よりは日本的なるものを選んだのも、徳川家に忠誠を尽くし、それが皇室への忠心にも繋がると信じた桂川家の歩みに準じようとしたものであったのではないと思われる。第Ⅲ章でも言及した今泉源吉の「猶太神とのたゝかひ」には、神風漣の一員、齋藤求三郎は「蘭學兵學の大家だった」⁵⁸⁾との記述が見える。異国の学問を究めた者が結局は日本を選んだ例としてのこの一文の中に、江戸から明治へ、鎖国から開国へ、オランダから英米へと、日本国内外の激動期、それを体現する者としての桂川家の血を引く今泉の万感の思いが表れているようではないか。

日本的なるものを選択し、英米に対する日本の戦いを支持した『みくに』であるが、1943年には第3号をもって突如終了する。その後日本の敗戦で第二次世界大戦が終戦し、日本は皇室を保ちながらも米国を手本として再出発することとなる。『みくに』は断絶しているように見えるが、最後まで『みくに』に寄稿していた人々は戦後、各自自分たちの信念を貫いたようである。例えば、今泉源吉は大著『桂川の人々』三部作を執筆している⁵⁹⁾。これをもって、今泉の『みくに』後の沈黙とするのは、彼の歩みをキリスト教という視点で眺めるからである。江戸期の蘭方医としての桂川家、幕末・明治から昭和にかけての動乱期を生き抜いたみね、そのみねの証言集である「名ごりの夢」連載、キリスト教と日本的なるものとのはざまにあってアイデンティティを模索した『みくに』、『名ごりの夢』の東洋文庫版の出版（東洋文庫版出版に際して、今泉源吉は『名ごりの夢』のエピソードは『みくに』に掲載されたものであると明言している⁶⁰⁾、『みくに』に対する思いが第二次世界大戦後も今泉の中から消え去っていないことがわかる）、そして大著『桂川の人々』の出版と辿れば、そこに、国内外の異文化の^{せめ}闘ぎ合いの中で格闘してきた一家の、一貫した流れを捉えることができる。今泉源吉の他、例えば、岩越元一郎は『みくに』継続誌ともいえる

⁵⁸⁾ 参考文献 29)書、p.6。

⁵⁹⁾ 1965年に『蘭学の家桂川の人々』、1968年に『蘭学の家桂川の人々〈続編〉』、1969年に『桂川の人々〈最終篇〉—蘭学の家』を上梓している。

⁶⁰⁾ 「はしがき」参考文献 33)書、pp.1-2。

『ふみ』を発行⁶¹、多田顯は、『みくに』の「みくに経済學講座」³⁴での当初の計画⁶²を意識してか、貝原益軒や二宮尊徳、作田莊一など、日本の思想家についての研究論文を発表している。苦悶と激動の時代を生き抜いてきた彼らの力強さには驚嘆するところが多いけれども、彼ら自身ではなく、他の人々を死闘の戦場に送る言葉を掲載した『みくに』を発行したこと、そして、彼らほどの知識人が反ユダヤ主義へと傾倒したこともまた、彼らの歩みの一部として我々の心に留めておかなければならないだろう。

第二次世界大戦後の日本キリスト教界では、反ユダヤ主義から反キリスト教へと進む動きは見られないが、第二次世界大戦中の反省による皇室批判ということであろうか、革命志向の勢いが日本基督教団内で強まった時期がある³⁵。それに伴い反米・反資本主義運動へと動く傾向が見られる。更に、日本の植民地時代を遺憾に思う気持ちのためか、中華人民共和国や大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国に寄り添う日本人キリスト教徒がいる⁶³。彼らは和平のための働きをしていると信じているだろう。しかしながらこのような動向が、日本の保守派には内憂外患行為に映ってしまい、かかる状況を打開しようとして、21世紀の現在も日本的なるものの中でキリスト教を捉えようとする日本人キリスト教徒がいる⁶⁴。この実情は、明治にキリスト教が解禁されてよりの状況と基本的にはあまり変化がないようだ。キリスト教徒は日本の中では少数派であるという意味で異端児のままである。キリスト教徒内でも立場が分かれ、他国のキリスト教徒との連携についても親中国・親朝鮮半島派と親米国派とがある。このような具合で、いったん国際的緊張が高まった時に、日本のキリスト教徒は、国内外で連携し、和平への使者として振舞うことができるのか。過去と現在を単に並べて対峙させるのではなく、過去と現在を俯瞰する位置を求め、そこからキリスト教界の歩みを総点検すること、それでこそ、現在の立ち位置を調整し、和平の未来に進むことができるのではないか。若者を戦場へと送る『みくに』の言葉は遺憾であるけれども、『みくに』に関する論考は、いわゆる世界宗教と言われるキリスト教の具体的在り方に新たな視点を提供してくれるものと言えよう。

⁶¹ 参考文献 7)書、p.2。

⁶² 参考文献 34)書、p. 15。多田顯の第二次世界大戦後の著作については、CiNii などでも確認することができる。

⁶³ 本論文筆者は、「日本基督教界における政治活動偏重のもたらす問題性」(『星城大学研究紀要』第14号、pp.15-37、2014年)で、日本のキリスト教徒の中の社会的・政治的活動について言及している。

⁶⁴ 日本保守派が見た日本キリスト教界について言及しながら、日本でのキリスト教伝道について論考したものに、笹井大庸編著『キリスト教と天皇(制)—キリスト教界を揺るがす爆弾発言!』(マルコーシュ・パブリケーション、2002年)がある。

参考文献

- 1) 丸山真男：日本の思想．岩波新書，1961，16.
- 2) 三島由紀夫：文化防衛論，ちくま文庫，2006，78.
- 3) Isozaki, A: Escaping the Cycle of Eternal Resources. *New Perspectives Quarterly* 9: 15 - 22, 1992.
- 4) Huntington, SP: *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order* (Paperback Edition), The Free Press. 2002, 94.
- 5) マーク・R・マリンス（高崎恵訳）：メイド・イン・ジャパンのキリスト教，トランスビュー，2005.
- 6) 笠原芳光：「日本的キリスト教」批判．キリスト教社会問題研究 22：114-139，1974.
- 7) 藤巻孝之：みくに運動の軌跡—一つの証言—付 山梨公会の場合．キリスト教史談会パンフレット 17，1983，3.
- 8) 今泉源吉：発刊の辞．みくに第 1 巻 1 号：1-2，1935.
- 9) 第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白．（オンライン），入手先 <<http://uccj.org/confession>>（参照 2021-3-7）.
- 10) 小室尚子：「みくに運動」におけるキリスト教土着化の問題．神学 56：221-249，1994.
- 11) 小室尚子：「みくに運動」におけるキリスト教土着化の問題—福元利之助にとっての「みくに運動」．神学 59：231-246，1997.
- 12) 大久保正禎：戦時下「日本的基督教」の内面史 今泉源吉に見る「みくに運動」への道程．（「戦中・戦後の日本の教会 戦争協力と抵抗の内面史を探る」研究会）富坂キリスト教センター紀要 8：35-53，2018.
- 13) 加山久夫：戦時下の賀川豊彦—「みくに」運動による賀川批判を中心として．明治学院大学キリスト教研究所紀要 37：93-130，2005.
- 14) 大島純男：今泉源吉と「みくに」運動．金城学院大学論集 173：17-41，1997.
- 15) 大島純男：池田千尋と「みくに」運動．金城学院大学論集 178：1-29，1998.
- 16) 『時の徴』同人(編)：日本基督教団戦争責任告白から 50 年：その神学的・教会的考察と資料（新教コイノーニア 33）．新教出版社，2017.
- 17) 黒川知文：ユダヤ人迫害史—繁栄と迫害とメシア運動．教文館，1997.
- 18) 中川健一：エルサレムの平和のために祈れ—続ユダヤ入門—．ハーベスト・ミニストリーズ，1993.
- 19) ミカエル・ブラウン（横山隆監訳）：教会が犯したユダヤ人迫害の真実—私たちの手は血塗られている—．マルコーシュ・パブリケーション，1997.
- 20) ノーマン・コーン（内田樹訳）：ユダヤ人世界征服陰謀の神話．KK ダイナミックセラーズ，1986.
- 21) アラン・ダーショウィッツ（滝川義人訳）：ケース・フォー・イスラエル 中東紛争の誤解と真実．ミルトス，2010.
- 22) 池内恵：現代アラブの社会思想—終末論とイスラーム主義．講談社現代新書，2001，159.
- 23) 藤原和彦：アラブはなぜユダヤを嫌うのか—中東イスラム世界の反ユダヤ主義—．ミルトス，2008，138.
- 24) 包荒子：世界革命之裏面．二西名著刊行会，1924.
- 25) 大野慎：ユダヤ人の陰謀を曝く．東京パンフレット社，1937.
- 26) 安谷宗虔：支那事変とユダヤ人の陰謀．同愛会，1937.
- 27) 石井絹治郎：南方生命線基地台湾・南支の感想．主張社，1940.
- 28) 四王天延孝[述]：第二次世界大戦来と我国防．名古屋毎日新聞社，1936.
- 29) 今泉源吉：猶太神とのたゝかひ．みくに第 9 巻第 2 号：1 - 7，1943.
- 30) 今泉源吉：思想戦に立つ賀川豊彦氏の反省を求む．みくに第 8 巻第 10 号：1-12，

1942.

- 31) 中田重治：聖書より見たる日本。八幡書店，1933，81.
- 32) 日本基督教団宣教研究所：戦時下の日本基督教団—1941～1945年（日本基督教団史資料集）。日本基督教団宣教研究所，1998，122－153.
- 33) 今泉みね：名ごりの夢—蘭医桂川家に生れて。東洋文庫 9，平凡社，1963.
- 34) 多田顯：みくに経済學講座。みくに第 8 卷第 2 号：14-18，1942.
- 35) 小林貞夫：日本基督教団 実録 教団紛争史。メタブレーション，2011.